

一貫教育校の広場

ニューヨーク学院
(高等部)

女子高等学校

志木高等学校

高等学校

湘南藤沢
中等部・高等部

中等部

普通部

横浜初等部

幼稚園

塾生皆泳進化と未来を先導する安全水泳教育

●幼稚園 教諭

藤本秀樹
ふじもとひでき

慶應義塾の水泳教育の原点は、1939年に小泉信三先生が唱えられた「塾生皆泳」です。目的は水難事故から自分の身を守ること、事故に遭った人を助けることは社会のリーダーが身に付ける責任である、という点にあります。幼稚園舎は1893年に臨海学校で水練(含遠泳)を行って

おり、1958年に専用プールが完成して以来、泳げないことが理由で命を落とすことがないよう、1000メートル完泳と競泳を続けてきました。

日本では1955年、168名の死者を出した紫雲丸沈没事故を契機に学校にプールが設置されるようになり、また1964年開催の東京五輪で大躍進したこともあり、「安全なプールで速く泳ぐ」を重視した水泳教育が栄えました。その結果、自然水域から遠ざかり、危険に遭遇した際の正しい判断力や行動力が養われなくなりました。水難事故の事例を見ると海や川への転落、我が子を助けに行った親子での二重水難事故が多く、服を着たまま溺れ死ぬ人が大半を占めることがわかりました。そこで、幼稚園舎では着衣水泳(1990年)と水難救助法(1997年)、遠泳(2012年)を教材に取り入れました。また、特に競泳能力の高い人ほど自分の泳力を過信するために、自然環境の危険性を甘く見て油断することがわかりました。



競泳一辺倒の我が国の水泳教育において、水辺で危機的状況に陥ったときに乗り越えられる判断力やたくましい行動力を養う教育システムの確立が、課題として明確になったのです。このような四半世紀にわたる実践と研究の結果、幼稚園舎では2014年から競泳では必要としない安全水泳

の体感・知識・技術(Water Competence)の習得が必須であると考えました。2019年、海での安全水泳実習(含遠泳)を最終目標に、プールでは海や川で自分の命をこれまで以上に守ることができるよう泳力を養う独自の水泳検定制度を先駆的に実践しています。

これまでの安全水泳の取り組みから、幼稚園舎は2022年度、スポーツ庁「令和の日本型学校体育構築支援事業」の研究実践校に指定されました。安全水泳を幼少期に体感し技術を習得することは、水難事故で命を守る確率を高めます。一方で技術だけでは限界があるため、危険を察知して危機的状況に対処できる知識と行動力を養う必要性があります。このような水に関する知識や水辺の危険性の把握能力は、近年増加しているゲリラ豪雨による洪水や津波に対する防災教育にもつながると考えています。幼稚園舎が自ら体感した安全水泳を活用し、塾生にも広めることが塾生皆泳を進化させ、世の中の水難防災教育の一助になれば大変うれしく思います。